

信頼と道徳性～18 世紀ブリテンの 銀行設立案で最も求められたもの

伊 藤 誠 一 郎

2025年5月

The Institute for Economic Studies
Seijo University

6-1-20, Seijo, Setagaya
Tokyo 157-8511, Japan



Confidence and morality: what the bank-proposals of 18th century Britain sought the most

Seiichiro Ito

MAY 2025

Abstract

Numberless bank-proposals were written in long eighteenth-century Britain. In historical studies they have been understood as the remedies for the scarcity of money and illustrated in the political rivalry in which the Bank of England was the winner. However, the bank-projectors' discussions were not exclusively economical neither political. Their principal purpose was the settlement and stability of the newly created system itself. The expansion of credit was not the only aim of those proposals. Throughout the century all those projectors argued that the banking system could survive and thrive by gaining confidence from the people and their confidence was produced by the morality of each person working there. Bank-projectors thought that credit system depends on reputation and opinion. Land-bank proposals in 1690s insisted on their reliability by claiming that their business was safe and the commissioners and directors of the proposed banks were well known and established. Charles Davenant considered tallies to be effective measures for recovering credit when the public finance of the country was securely administered by the able statesman and his honest counsellors. Although his name was registered in people's memory with a financial tragedy of 1720, John Law in his book had proposed the

establishment of a land-bank with a sufficient fund and a well-ordered organization. Sir James Steuart analyzed the whole credit system in which confidence worked as a fundamental idea. He recommended private credit founded on and guaranteed by land security rather than commercial credit relying only on the expectation of the success of business. Adam Smith's explanation of banking was very theoretical. However, he also had to use the principle of confidence in his analysis of commercial credit when he could not trust the morality of bankers and merchants.

信頼と道徳性～18 世紀ブリテンの銀行設立案で 最も求められたもの^{1, 2)}

伊 藤 誠 一 郎

はじめに

いわゆる金融バブルの生成と崩壊は 17 世紀オランダのチューリップ投機が最初だとしばしばいわれるが、より今日のそれに近い形での古典的な例といえるものは 1720 年のフランスにおけるジョン・ローのミシシッピー計画とその崩壊と、同年のイングランドでのいわゆる南海泡沫であろう。これらはその半世紀後のサー・ジェームス・スチュアートやアダム・スミスによる経済学の形

-
- 1) 本稿の 1 節から 6 節まで、つまり本体となる部分は、末尾の参考文献にある、わたくし自身の学会報告原稿の (1) から (9) のうち、その時点でできていたものをもとにまとめた日本英文学会での報告原稿 (10)、日本イギリス哲学会関東部会での報告原稿 (11) を、さらに加筆修正し、2024 年 12 月 9 日の成城大学経済研究所で、本稿と同じタイトルのもと報告した原稿に加筆・修正したものである。これは、(1) から (9) までの報告原稿を骨格としながら準備を進めている著作への企画書、またはその中間報告のようなものでもある。また成城大学経済研究所での報告においては、はじめに、と、むすびにかえて、のところで、本稿における経済思想史的分析が、金融の理論や、歴史、思想史研究にとってどのような意義があり、どのようなメッセージを可能とするかについての検討を試みている。そこでは、本稿の本体における 18 世紀ブリテンの数多くの銀行設立案をめぐる経済思想史研究が、理論、思想という、より広い視野に向けてどのような問題を投げかけることができるのかについて、少々野心的な試みをした。報告の際には、聴講者や研究所の皆様から私が気づいていなかった点について、さらには今後の研究の展開にとって大きな示唆となるコメント、質問を多くいただいたことに深く感謝をしたい。本稿は、このような講演という機会をいただいたからこそまとめられた原稿であり、成城経済研究所の皆様、また経済学史学会等でいつも大きな学術的刺激をいただいている立川潔先生からお声がけをいただいたことに深く感謝したい。
- 2) 本稿で引用・参照した一次文献は、同一年に複数の著作を残している著者も多いので、文中に記載する場合は、略式の著作名も加えた。

成にいたるまでずっと、信用 credit が論じせれる際に大きな影を落とすことになった。そしてその後今日に至るまでにも何度もバブルは生成と崩壊を繰り返し、そのたびに犯人捜しが行なわれて来た。古典的な例としてはマルクスの恐慌論であり、直近の日本での例だといわゆる日銀論争であろう（翁 1993；岩田 1993）。前者に関する最新の研究成果としては、MEGA 版『資本論』からマルクスの経済理論を全体的に再検証した宮田惟史氏が次のような答えを提示している。資本主義社会の進展に合わせて進む「利潤率の傾向的低下」は、「利潤率最大化を目的とする資本主義システムと正面から対立する矛盾」（宮田 2023, 183）であり、「利潤率の低下によって現実資本での運動部面を失った貨幣資本の過多は、新たな投下部面を求め、「冒険的〔となり〕、投機、信用思惑、株式思惑、恐慌」を促進する。」（宮田 2023, 248）こうした前提の上で、マルクスが示した恐慌のメカニズムは次のように説明される。「支払いのための真正な出所をもっていない」、「不足している資本」（宮田 2023, 252。いずれも宮田氏による MEGA からの引用の言葉）に応じるべく信用を供与しても、それは還流しないため銀行は不良債権を抱え込むことになり、銀行は倒産に追い込まれる。つまり、銀行信用は恐慌を回避することはできない。しかし宮田氏はマルクスが次のような補足をしていることも指摘する。「銀行が前貸しする貨幣が「不足資本」を意味する場合でも、「銀行の信用が動揺していないかぎり」であれば、信用貨幣の増発によって「パニックを緩和」することはできる。しかしながら銀行がこうした貸出を際限なく行えば、膨大な不良債権が生まれ、信用のバランスシートが傷つき倒産しかねない。」（宮田 2023, 253-4）つまり宮田氏の結論としては恐慌への突入は不可避であった。私がここで注意したいのは、銀行信用の動揺がない場合を宮田氏、そして宮田氏が見たマルクスは想定していないということである。しかし、ここ数十年日本、アジア、南米、アメリカ、ギリシャと、まさにバブルとその崩壊のリレーが繰り返されてきたが、銀行信用、そして中央銀行信用そのものが全くなってしまう、回復できなかった例はないし、それ以前もそのようなことはなかった。たしかにこのような理解は宮田氏やマルクスからすれば、信用の空虚性の無視であり、それはやがて暴露され、資本主義の矛盾が深まるということになるだろうが、現実として人々はその空虚性を承知のうえで政策的に隠ぺいしてきたともいえる。

最近ではこうした信用の空虚性の隠ぺいをむしろ肯定的に、積極的に利用す

る議論も見られる。MMT (Modern Monetary Theory) は、租税という担保の範囲内であれば貨幣をいくら発行しても問題はないという³⁾。これはしばしば内生的貨幣供給説との比較で議論される。内生的貨幣供給説では、貨幣は外生的に供給され政策的にその量は調整されうるという貨幣数量説では異なる立場をとり、信用貨幣は債権債務関係に基づいて生成されるという。果たして MMT がこの内生説の一端をなすのか否かについては議論があるが、貨幣とは債務の発生と同時に預金通貨として、いわば何もないところから、ゼロから作られる、つまり、理論的には預金準備（それが貴金属貨幣であってもなくても）などなくても信用貨幣はできると主張している点ではかわりない（内藤 2011；楊枝 2022；金井 2023）⁴⁾。そして彼らの議論のなかで最近注目を浴びているのがイネスの 1913 年の論文である。イネスは数量説を次のように批判する。

3) Wray (2012), また MMT をめぐる問題点, 改善点については Epstein (2019) を参照。

4) 今日の銀行の準備金について金井雄一氏 (2023) は、次のように説明する。「兌換の有無にかかわらず、銀行券には－純粹の国家紙幣とは異なり－還流がある」。そして、銀行券は「信用取引＝債権・債務関係が生じて初めて発行されるものであり、したがってその債権・債務関係が終了すれば銀行券は発行元へ還流してきて消滅する。」これは兌換であるか不兌換であるかとは関係ない（金井 2023, 169）。一言でいえば、銀行券が債権・債務関係にもとづいて発行されているのであれば、それが兌換銀行券であるかどうかは本質的な問題ではないという。しかし、歴史を振り返ったとき、この金井氏の説明ではどうしても理解できないことがある。金井氏は、「まず信用取引がおこなわれ、その債権・債務は信用取引から生まれたイマジナリー・マネーによって決済される。金属貨幣の内在価値とは無関係に、債務が清算されればよいのである」という。しかし、17・18 世紀のほとんどの銀行設立案は「内在価値」に非常にこだわっていた。金井氏の信用先行説だけではこのことを説明できない。また、この疑念は、金井氏の不換銀行券となったドルの説明についてもあてはまる。「金交換が廃止されてもドルの地位が維持されるのはなぜか」という疑問に対し金井氏は、「ドルの国際通貨機能は金交換保証のためではないと把握できる信用先行視点が保持されていれば、そのような疑問は生じなかったであろう」、と答える（金井 2023, 166-7）。しかしそれならなぜ兌換停止となる前にまずアメリカの連銀への金準備の集中という事態が必要だったのかということとは説明できない。金井氏に限らず、信用先行説、信用の本質を債権・債務関係としてのみ見る説だと、原理的には、貴金属貨幣は一切なくても信用は成り立ちうることになる。だとすると、金・ドル兌換停止に至るまでの長い歴史の間、なぜ銀行というものは貴金属貨幣準備にこだわり、それは縮小されていったにしても、なぜぎりぎりまですがりつくように貴金属準備にこだわったのが説明できないのではないだろうか。実際、いまでもニューヨーク連銀の地下に大量の金塊が保管されていることは、人気映画ダイハードの題材になるほどよく知られたことでもある。言い換えると、不兌換でもなにも問題ないはずの現在の信用制度において、なぜ今なお金にこの制度はこだわるのかという、決して小さくない疑問が残ることになる。本稿が以下で示す議論で導き出せる答えは、貴金属であれ別の形であれ預金準備

「貨幣数量説は、「貨幣」の過剰発行を防ぐための発券規制をすべての政府に駆り立ててきた。しかしながら、銀行券にはある特別な危険が潜んでいるという観念は何等根拠のないものである。…発券を制限することで銀行業を規制しようとするのは、銀行業の問題の全体を全く誤解していることで、間違った結果に終わるだけである。危険は銀行券にあるのではなく、慎重さを欠いたいい加減な銀行業にある。銀行業が債権債務の原理の適切な理解の下で、正直な人々によって運営されることが保証されるならば、そうすれば、銀行券は自らを適切に処理するであろう。」（イネス 楊枝 訳 2020（下）、119-20）

つまり、イネスが言うには、銀行が貨幣をつくりだすこと自体に問題があるのではなく、もし銀行が「慎重さ」をもって「正直な人々によって運営」されれば、金融システムがリスクにさらされることはない。しかしこれまで銀行制度が語られるときはいつも、宮田氏がマルクスの言葉をもって表現し、結果的には破滅的な結果となることを前提していた銀行の信頼や、イネスが浮き立たせた銀行行動の道徳性というもの、これらはどこかそもそも期待すべくもないものと暗黙裡に想定されてきてしまったのかもしれない。以下本稿で見えていく過程で、それと並行し、重なり合いながら繰り広げられ、継承された論争－土地銀行をめぐる論争、1720 年前後の議論、スミスやステュアートによる銀行制度論－は、銀行とはそもそもリスクを抱えたものであるからこそその行動に、より正確に言うと、銀行にかかわる諸個人の行動に、道徳性が求められてきたということであり、それをどのような形で実現させるかが争点であったということである。それだけでもこの時期に書かれた膨大な資料による検証が求められるが、ここではその全体像をえがき、そもそも銀行制度ができる過程で人々はそのこになによりも安全性、そしてそれを支える諸個人の道徳性を見出したかったことを示したい。

今日の、成長し続けることをその宿命としている近代資本主義は、それを可

というものに人々は銀行という制度への信頼 confidence を見ていたのであり、その限りにおいては、預金準備はこの制度において不可欠の、本質的な役割を担っていたという説明である。そして、信頼を満たすことが目的であるのだから、それはそれぞれの時代、場所で中身は異なってくるといえる。

能とする貨幣・金融の無限性の発見と、その思想やそれに基づく制度の普及・定着によってこそ可能であった。しかし、貨幣や金融の不安定性が露見したとき、学者もマスコミも金融業者もみな、それをイレギュラーな、どうにか抑え込まなければならないものとしてしか考えてこなかった。しかし、本稿で明らかにしたいのは、そもそもが、今日の資本主義を支える貨幣・金融制度は、近代資本主義が確立する前に、さまざまな視点からその問題点について議論が重ねられてきたのであり、それは、決して無限性をもたらす「哲学者の石」としてのみ発見されたのではなく、むしろ、最初から、暴走・悪徳・破綻といった、その制度の死といかに向き合っていくかを中心的な課題として常に論じられ続けてきたということである。ここではそれが、名誉革命からスミスまでの初期近代のブリテンの諸論者の言葉によってどのように語られていたかのにいての物語の大枠を示していく。

1. イングランドの経済論説のはじまり

まず、18 世紀のブリテンの議論を検討するための前提となる知識として、17 世紀のイングランドで、どのようにトレイド、貨幣、信用が論じられ始めたかを、拙著 *English Economic Thought in the Seventeenth Century: Rejecting the Dutch Model* (2021) にもとづいて説明したい。

16 世紀末頃からイングランドでは、ブリテン帝国の防衛をどうするかを論ずる中で、海軍力の増強、そしてその助けとなるべく漁業を振興することが求められていた。そして 17 世紀に入ると、より積極的に、漁業こそがイングランドのトレイドの繁栄の原動力であり、その手本はオランダのニシン漁にあると考えられた。遠洋に出たまま長期にわたり海上に停泊し、本土とのシャトル船によって必要物資を運び込み、収穫されて塩漬けにされたニシンを持ち帰るというやり方、船員の構成、道具の製作、しまいには資金調達方法まで詳細に論じられていた。やがて共和政期に入ると、バイコン主義者であるサミュエル・ハートリブを中心とした、いわゆるハートリブ・サークルの面々によって、イングランドの経済・社会の改良のためには、オランダのそれを全体として真似るべきだと唱えられるようになってくる。しかし、その中でもより大きな関心を集めたのが、銀行設立であった。もともと悪質な質屋が生活苦の中でカネを

借りた貧民をさらに苦境に陥れていることが問題になっていたが、世紀中ごろから、ハートリブ・サークルの論者を皮切りに、多くの慈善銀行が提案されるようになり、やがて貧民だけでなく、有望な若者がトレードを推進するための資金提供を目的とした抵当銀行もしばしば提案されるようになってきた。ただ、それらの議論に共通していたのは、銀行が担保の扱いの点でまず借り手から信頼できる、悪徳でない機関であること、そしてそもそも組織として安全であり、評判のいい知名度の高い人間によって運営されていることを各企画の売りとしていたことであった。その担保・抵当を土地とする土地銀行もすでに名誉革命前から提案されていたが、その趣旨・目的は抵当銀行と同じであった。だから、王政復古後に激しくかわされた利子率をめぐる論争も、その争点は実は、利子率は政策的に決めるべきか自然に任せるか、ということではなく、トレードの繁栄の原因は低利なのか、それとも銀行などの安全で信頼できる銀行制度と、それを支える抵当をより確かなものとするための公的な土地登記所の設立なのか、ということにあり、オランダから制度を真似るにしてもこれらのうちのどの点を真似るべきかにあった。その後名誉革命期、そして拙著の範囲を超える名誉革命後の時期に至るまで、イングランドで一貫して強い関心と呼んだのは、信頼に足る安全な銀行制度の確立の必要性であった。その制度への信頼はなによりもそれを運営する人間の能力、道徳によってつくられるものであった。以下では、この問題意識が、名誉革命後の土地銀行論争から、ジョン・ロー、ジェームス・ステュアート、アダム・スミス、そしてこれらの論者の合間をうめる数多の銀行企画案や信用をめぐる議論において、一貫しており、そこでは、名誉革命前と同様、制度そのものに対する信用と、究極的にはそこに関わる人間の思慮深さ、名誉、誠実さとそれに基づく信頼が求められていたことを示す。

2. 土地銀行論争

Rubini (1970) は、イングランド銀行と、その設立と同じ年に提案された J. プリスコーによる国立土地銀行企画をはじめとする多くの土地銀行設立案のあいだでたたかわされた論争は、カントリー・トーリーとジャントゥ・ウィツグの政治論争の反映であると考えた。その図式は比較的最近の Pincus (2009) や Wennerlind (2011; 2014) による名誉革命後のイングランド社会・経済の構図の描

写とも一致している。しかし、もちろんこの論争が深く、複雑にその時代の政治事情とかかわっていたことは否定しようもないが、各企画案がその売りとして強調していたのは、名誉革命前と同様、その制度的信用が良き基金をもち、いかに信頼に足りる人によって構成された組織であるか、という点であった。

ヒュー・チェンバレン Hugh Chamberlen はこの時期の最も著名な土地銀行企画者であったが、1690 年の『あるささやかな提案 *An humble proposal*』で、貧民救済とハイウェイ修復のために「新しい正貨 *new Species of Money*」を作ることを提案する。これは、彼の別の手稿によると、「健全な良い基金をもつ信用手形 *Bills of credit upon a sound and good fund*」の提案であり、この手形は「金銀等と同様に使える」(Chamberlen, 'The discourse', 1690, f.93) という。ただし、ここでは土地を基金とするかどうかについては触れられていない。このことは、のちに彼の提案する企画の大半が土地銀行設立のそれであるにもかかわらず、結局のところ彼の提案の本質が「健全でよい基金」にあったことを示しているといえよう。さらに、チェンバレンにとって重要なのは、この基金が「評判 *reputation*」や「よく知られている *well known*」ことによって支えられていることであった。こうした議論は、拙著でみた、17 世紀初頭からつづく悪徳な質屋への批判、その対策としての土地登記の推奨といった論点を伴っており、たとえば 1691 年のロバート・マレー Robert Murray の手稿は、なお、質として「盗品をうけいれる」質屋がおり、こうした事態を防ぐために何らかの登記のようなシステムが必要なことを説いている (Murray, 'The humble proposal', 1691)。そして、この時期の紙券信用の企画は、それが銀行券であれ国庫証券であれ、その信用の基金が何であるかが論者の強調点であり、そこでの基金 *fund* とは、17 世紀後半ずっとそうであったように、担保 *security* と同義であった⁵⁾。また、チェンバレンは、オランダ、ハンブルク、ベニスの銀行には 1/3 の準備しかないことを指摘したうえで、それは、長い経験やよい評判がそれらの基金を強化しているという (*A supplement to the proposal*, [1691], [2])。一つ注意しておきたいのは、この時点では基金の内容として土地が出てこないことである。

チェンバレンは 1693 年には次のように言う。「世界の大半の交易は正貨に

5) たとえば, Killigrew [1690], 4. またチェンバレンの次の言葉も、このことを説明している。
'Tickets, Tallies, or Bills of Exchange, upon a sound Fund, are Equal, if not Superior, in Use and Value to the best Money of Gold and Silver.' (Chamberlen, *A proposal*, [1691], [2]).

よっておこなわれることはあまりなく、ほとんどは交易がうまくいく過程で大きな利益が上がるという評判 Reputation や評価 Opinion にもとづいておこなわれた」。そしてオランダを例にあげながら次のように言う。「信用は商業の主たる道具であり、その信用は、実物 Real ではなく評価または評判による基金にもとづいていた」。「それゆえもしこの王国で、充分な貨幣ストックの不足が、他のどの国の信用よりも実物の、実体のある基金にもとづく信用 a Credit grounded upon a more Real and substantial Fund, than the Credit of any other Nation によって補われうるのなら、この王国はヨーロッパのほとんどの他の王国や国家よりも大きな国民の交易をすすめる能力をより多く持つと、おそらく、最も合理的に結論づけられるであろう。」すなわち、もしこの王国（ここではスコットランドをさしている）で「評価」や「評判」だけでなく、「実物の、実体のある基金」にもとづく信用があれば、トレードにおいてオランダに優越することができる。ここで想定している基金こそ土地であり、それはその生産性などの経済的基盤というよりも、記録として明確化されている、つまり登記されているからである (Chamberlen, *To his grace William Duke of Hamilton*, 1693, 2)。土地登記制度を前提とした土地銀行設立案は名誉革命以前からあったし、またそれはこの制度によって評判や評価の補強が想定されていた。この議論において党派性という意味での政治性は直接は関与していない。あくまでも、制度の安定を求める観点からのものであった。

1694 年にイングランド銀行が設立され、同じ年にジョン・ブリスコー John Briscoe は国立土地銀行設立を提案する長編のパンフレットを出版する。ここで強調されたのは、これまで歴史家の中で定番となっていた、貨幣利害対土地利害、それにオーバーラップしたウィッグ対トーリーといったような図式ではなく、そもそも土地銀行というあまり馴染みのない新奇な企画を人々は受け入れられるのか、そしてそれには十分な信頼がおけるのかということであった。貨幣利害と土地利害が政治イデオロギーをまじえながら激しく構造的に対立するのは、あくまでも長期債が大量に発行されるようになってからであり、1694 年時点ではそもそもそうした問題は顕在化はしていなかった。銀行という制度、紙券という新奇な物に対する不安、そうしたものへの信頼に基づきながらそれらに慣れていくこと、こうしたことが最大の争点・論点であった。チェンバレンもこのころには、銀行の基金としての「土地担保 Land Security」が、火事や盗難

から逃れられる点で「物品の担保 Goods pledged」より優れていることを明確に述べるようになる (Chamberlen, *Some useful reflections*, [1694], 3)。

ブリスコーは、一方では提案する企画の収益性を考えたが、他方では、それまでの諸論者と同様に企画そのものの信頼性を強調した。ブリスコーは、イングランド銀行は地主には有害なものであり、彼の提案する土地銀行は国民全体に有益なものであるという。そして、その紙券信用は土地を担保としているが、その信頼性は、究極的には「検証 Examination」, 「宣誓 Oaths」, 「証人 Witnesses」といった諸個人の道徳性に求められた (Briscoe, *A discourse on the late funds*, 1694, 23)。また、自分こそ土地銀行企画の最初の発案者だと主張することによって、その企画の評判をあげようとする。こうした手法は自らの企画への信頼性を高める名誉や誠実さ示すものとして重要だった。つまりこの論争の争点は、基金または担保の中身が何なのかということだけではなく、その企画が信頼を置けるものなのか、そのように見えるものなのかということにあった。ブリスコー、チェンバレンの他に、彼らの強力なライバルである、ジョン・アスジル John Asgill, ニコラス・バーボン Nicholas Barbon らがこの争いに加わっても争点は同じであった⁶⁾。

3. チャールズ・ダヴナント

チャールズ・ダヴナント Charles Davenant の著作は、アダム・スミス以前にトレイドや金融・財政の問題が語られるとき、多くの論者が引用し、参照していたが、彼の信用の定義はこの時代のその典型である。彼は 1696 年に執筆した『信用論草稿』で、以下のように信用を説明する。

「人間の心にあるものすべての中で、信用ほど奇怪で Fantasticall 気難しい Nice ものではない。それは決して強要はされるものではない。それは評価 opinion によって決まる。それはわれわれの希望 hope や恐れ fear の感情によっている。それは何度も求められるようなものではなく、しばしば理由もなく消え去り、一度失われたら取り戻すことはほとんどできない。

国務を司るときの叡智 wisdom によって、または戦場での武勇や行状

6) アスジルやバーボンの土地銀行企画については、私の報告原稿 (4), (5) で論じた。

によって人々が得る名声 *Fame* や評判 *Reputation* に、信用は非常によく似ており、多くの場合ほとんど同類である。有能な為政者 *able statesman* や、偉大な指導者 *great captain* は、何らかの不運や事故、過失、不幸によって、不興を被り、現在の人気や評価を失うが、しかしやがて、輝しき値打ちがあり、功績の真の蓄積があるのならば、それは取り戻されるであろう。同じように、信用もしばらくは身を潜め、いくつかの困難のもとで難航するであろうが、しかし安全で健全な基礎が根底にあればもしかしたら回復するであろう。」(Davenant, *Two manuscripts by Charles Davenant*, 1942, 75; Davenant C. 1771, *Works*, vol. 1, 151)

ダヴナントにとって信用とは、「希望」と「怖れ」に依存する非常にもろいものであり、評価に依拠し、しばしば理性なきままに利用され、それは、国家行政における叡智や戦場での勇気によって得られる名声や評判に似たものであった。ダヴナントが推奨した紙券信用の形態は、銀行券ではなく国家の発行する短期債の一種である割符 *tally* であったから、こうした信用の描写は抽象的というよりかなり現実的なものであった。

ダヴナントは続ける。

「われわれが公人または私人を信頼するのを止めるのは、われわれが彼らの行為に欺瞞や不誠実を感じるとき、または彼らの仕事に見込みがないと判断するときのみである。しかし国家の何らかの事故によってしか通常の支払いが中断されないとき、政府と諸個人が〔支払いから〕解放されることに最大限の注意を払うとき、そして、すべての要求をみたすのに十分な基金があることが明らかにされるときには、人々の心は穏やかになり、そして満たされるであろうし、相互の便益は、互いに助け合うことの欲求へと人々を導くであろう。実物のストックで取引をするような商業国民はかつて存在しなかったこと、互いの信用 *trust* や信頼 *confidence* が、服従、愛、友情、会話のやりとりと同様、人々を互いに結びつけ、そして引きつけるのに必要だということを人々は見いだすであろう。そして、だれにも頼ることができないとき人がいかに弱いかということを経験が教えるとき、人は、互いに助けようとし、そして、隣人の助けを訴え、そのことによって当然ながら徐々に信用 *Credit* を再浮揚させるにちがいない。」(Davenant, *Two manuscripts by Charles Davenant*, 1942, 75-76; Davenant C. 1771, *Works*, vol. 1, 151-152)

ここでも社会的、倫理的表現によって信用が描かれるが、これは当時の現実的な問題を反映している。ダヴナントは、「あらゆるいいがかりを満足させられるのに十分な基金があることがわかるようにされうるとき、人々の心は平静になり落ち着くであろう」という。こうした表現は、17 世紀後半に広く書かれた慈善銀行や抵当銀行の設立案、そしてとくにこの草稿が書かれるまでの数年間に大きな議論を生んだ、チェンバレン、ブリスコー、アスジル、バーボンらのさまざまな土地銀行企画とイングランド銀行の間の論争を文脈としていって考えられる。あらゆる銀行企画案は、銀行というよりも、それが作り出す信用の安全 safety を保障するために十分で、確かな基金の設立案であったといえる⁷⁾。他方ダヴナントの、「お互いの信用と信頼は服従、愛、友情、または会話のやり取りと同様人々を互いにつなぎもたせるのに必要である」、そしてこうした相互の信頼関係が信用を再び浮揚させることになる、という言説は、のちにスミスに先んじて経済学の体系化を行ったサー・ジェームス・ステュアートにおける「信頼 confidence」を基礎原理とする信用論のコンテキストを提供することになる⁸⁾。

ただ、ここでダヴナントがいう「信頼」とは、彼が具体的な信用の形態として考えていた割符のそれであり、これはいわば短期国債であったので、返済の担保となるもの、つまり「信頼」を与えるものは税であった。そのため、『公収入交易論』の二番目の章で上記のような彼の信用論を述べたあと、続く各章でながながと彼が論じたのは、いわゆる健全財政論であり、より確実な税収入

7) 西山徹氏は、この時期の文学と貨幣・信用問題に、「「信じる」どうか」という共通の論点・認識を興味深くも指摘している。西山氏は、Coley Cibber の『愛の最後の策略』を次のように分析している。「真の愛をもつ女性が存在するかどうかではなく、真の愛を持つ女性が存在すると「信じる」かどうかである。つまり、それが真実かどうかではなく、それが真実であると「信じられる」かどうかの問題にされているのだ。愛が貨幣であるなら、貨幣もまた愛であり、それぞれに真の形があることを信じ、それを求めることが正しい道であり、そうすれば結局は報われるのだ、というのがこの劇の説くところである。そして信用が貨幣であるとすれば、国の基盤を形成する貨幣が不安定になって国に対する信用が揺らぎ、改鑄によってロンドンがパニック状態にあったときの鎮静剤としてこの劇は作用したと思われる。」(西山徹「詩はグローサーズ・ホールにありー 1690 年代貨幣危機の文学ー」, 2017, 152-3)。

8) 本稿で貨幣と信用の議論をたどる「長い 18 世紀」のイギリスは、「イギリス病」が広くみられ、文学においても表現されたある種、心理的にも不安定な、ときには陰鬱な場所であり、こうした場でこの「信用」の問題が論じられていたということに注意すべきである。こうした 18 世紀イギリスの状況については、榎本太「序にかえて」(2005) を参照。

をうるための消費税の提案であった。そしてこの「信頼」を得るための政策を遂行するのは「為政者 statesman」であり、その補佐をする「廷臣 minister」たちであった。この廷臣たちがどのようなものであるかを論じたのが『公収入交易論』の最初の章、「政治算術」であった。「有能な為政者 able statesman」は「叡智 wisdom」の徳、つまり「知識 knowledge」をもって統治を遂行しなければならないが、これは、為政者の周りにいる廷臣たちによって集められるものであり、それは為政者に都合のいい「お世辞 flattery」ではなく、正確な情報でなければならない。つまり、信用の基盤となる「信頼」を作るためには為政者、そして廷臣たちの叡智や、それをありのままに伝える「正直さ honesty」にもとづく政治算術が必要であった。ダヴナントの場合、銀行設立案ではなく、政府の割符の発行によって貨幣の創造と考えたのだから、その担保となる税収入の管理が、銀行における担保の管理と同質のものとなり、それには結局のところ銀行設立諸案と同様に管理者諸個人の徳性、能力が求められた（伊藤 1992；伊藤 1995；Ito 2005；Ito 2011）。

4. ジョン・ロー

以上見て来た 17 世紀末の信用をめぐる議論を受け継いだジェームス・ステュアートや、表向きはそれを無視しながらも信用論をあきらかにステュアートから学んだアダム・スミスに至る前に、そのいずれもが意識した、ミシシッピ計画の 1720 年の失敗をもたらししたジョン・ロー John Law がいた。この金融史上避けて通れぬ事件のずっと前の 1705 年に、ロー自身、『貨幣と商業』という著作を書き、その前後の信用に関する議論の継承の一部として足跡を残していた⁹⁾。

ローはこの『貨幣と商業』を出版する前の年に、「土地銀行についての試論 Essay on a land bank」という手稿を書き、その中で土地銀行設立案を提示しているが、『貨幣と商業』では、その土地銀行設立案を、一国の経済全体との関連で説明している (Law, ed. by Murphy, *John Law's 'Essay on a land bank'*, 1994; Law, *Money and trade considered*, 1705)。そこでの解決すべき課題は、17 世紀以来イン

9) ジョン・ローの生涯、著作、活動の詳細については Murphy (1997) を参照。

グラントで常にトレードの最重要問題として論じられてきた貨幣不足への対策であり、ローは、それを「最も安全で、有益で、実効性のある」ものにしなければならないと考えた。こうした視点から彼は、貨幣の特徴、貨幣のトレードへの影響、貨幣を増加させる方法を論じる (Law, *Money and trade*, 1705, 1)。

貨幣を論じる場合、ローの前にも後にもいつもそうであったように、貨幣に必要な特徴をローも列挙する。それは、確かな質、運搬の容易さ、耐久性、分割可能性、価値の安定性であった。これらの特徴を備えた銀地金は商品の価値をはかる尺度であり、その価値によって商品を交換する手段であり、それによって支払いの契約が履行される (Law, *Money and trade*, 1705, 6-7)。そして、ローは、国内外のトレードは貨幣に依存しており、貨幣量によってその成功が左右され、その貨幣量の増大のためには、それまでに推奨されてきた貴金属貨幣の輸出禁止や、金地金を外国から持ち込むよう強制するような政策ではなく、銀行の利用こそが有効である、と主張する (Law, *Money and trade*, 1705, 35-36)。

ローによると、銀行はスウェーデン人が発明したものであるが、イタリアでも長く利用されてきた。銀行の発明は、銅貨が重くてかさばるという不便を解消し、貨幣を銀行に担保としてあずけて、その価値の信用 Credit を与え、これによって支払いを行い、トレードを容易にした。つまりそもそも銀行ができたのは、貨幣不足の解消を直接の目的としていたためではなく、あくまでも技術的な便宜のためであった。ローはアムステルダム銀行を、商人が貨幣を持ち込み、商売をするための「安全な場所 a secure Place」、と説明する。なによりも貨幣（貴金属）は、商人自身の家にあるよりも、銀行においてある方が、「火事や盗難にあうことが少ない」(Law, *Money and trade*, 1705, 36-37)。

しかし、ローが気にしていたのは、そして彼以前も以降も銀行について論じる者たちがいつも注意していたのは、貨幣の準備とそれに対して創られる信用の量の関係である。ローはまず次のように言う。「貨幣が供与された信用と同じ分だけ預けられているような銀行は安全である。なぜなら、もし全額引き出しが要求されても、銀行は支払えないようなことはないからである。」しかしローは、現実にはそうっていないともいう。とはいえ、かりに払い戻しが十分になされないことがあったとしても、担保は取ってあるのだし、利払いもなされるのだから、発行された信用はそれほど減価することもないだろう、と結論付けている。イングランド銀行の場合は、「議会による基金 Parliamentary

Fund」(Law, *Money and trade*, 1705, 37-8), すなわち税をその担保としているが、スコットランド銀行は 100,000 ポンドを基金としているものの実際にはその 10 分の 1 しか支払われていない。ローによれば、それでも、貸された額のほとんどの担保が登録されているのだから、イングランド銀行よりもより安全だという。いずれにせよ、ローはさまざまな銀行の例を考え、いずれの場合も貸付額と同等の額の貨幣が銀行にないにも関わらず、「迅速で容易な支払いというような他の便益が障害に勝り」(Law, *Money and trade*, 1705, 41), さらに、その貸付によってトレイドが繁栄し、結果として貨幣を外国から国内にもたらし、貨幣量が増えるのであるから、銀行の貨幣準備も増えることになる、だから問題はない、と楽観的に考えていた。ただし、結論は楽観的であったにせよ、その問題が、供与された信用にたいして十分な担保があるか、その意味で安全な銀行といえるかという点にあったことは、ローの前と後の議論と同様であった。

すなわち、貨幣とトレイドは同じ率で増えていくけれど、「貨幣の支払いを約束する信用は、それが貨幣との間で守るべきある比率を超えて、問題なく拡張していくことはできない」。しかし彼は、銀以外にも「安全と便宜を兼ね備えた」(Law, *Money and trade*, 1705, 60-1) 貨幣はあるという。それが土地銀行の発行する銀行券だという。それは、なによりも価値の安定性という貨幣の必要条件を銀よりもよく備えているという。

しかし、実際のローの土地銀行設立案は、ほとんど銀行組織とその管理の詳細の列挙であり、その点では 1690 年代のさまざまな土地銀行設立案と同じであった。40 人のコミッショナーが議会によって指名され、彼らは銀行とその職員の管理について議会に対して責任を負い、そのコミッショナーたちが、銀行券を発行する権限をもつ。議会に設置された委員会が、銀行の営業の監視をする。議会は三通りのやり方から、銀行券発行の「最も安全な」方法を選ぶ。一つは、土地担保の 1/2 または 2/3 を越えない価値の銀行券の発行を認める。二つ目は、コミッショナーたちが土地を所有し、その全価値の銀行券を発行する。三つ目は、その土地を売却してその全額の銀行券を発行する (Law, *Money and trade*, 1705, 84-5)。

ローはさらにさまざまな規定を続ける。コミッショナーたちによる委任機関、つまりこの銀行は自らの銀行券以外は受け取らない、一度に 5 万ポンド以上の銀行券の発行はできない、一年半ののちには議会による制限がない限り銀行

券の発行は要求されるだけできる。そしてさらなる詳細がながながと続く (Law, *Money and trade*, 1705, 86-8)。

1690 年代の土地銀行設立案のほとんどが、その提案の内実はその銀行の組織・管理の方法についての詳細であり、それを示すことによって銀行が安全で信頼に足る組織であることを示そうとしていたが、その点でローの土地銀行設立案もまったく同じ類のものであったと言える。

5. サー・ジェームス・ステュアート

サー・ジェームス・ステュアート Sir James Steuart は、信用の議論を始めるにあたって、ダヴナントを念頭に置きながら、過去にある信用に関する議論を次のようにまとめる。

「信用を論じる政論家の多くは、それをみなして、その確立が容易には説明されないある種の信頼に負っており、ほんのささいな不利な状況によって消滅してしまうという、きわめて不可思議な性質のものとしている。」

(Steuart, *The works*, 1805, vol. III, 138. 訳, 218)

これは、希望と恐怖に依拠しながらちょっとしたことで脆く壊れてしまうというダヴナントによる信用の描写と趣旨として同じように見える。ただ、ステュアートの場合「信頼 confidence」という概念をより前面に押し出し、彼自身の信用論の展開の中でもこれが基礎概念となってくる。ステュアートいわく、その揺籃期における信用は十分に確立されていないので非常に繊細なものであった。この繊細さは「信頼」の特徴であった。「信頼の根拠は世間の評価以外にはなにもなかったのであって、このような場合には、信用は単なる幻影であり、かすかなそよ風にも消されてしまう淡い蒸気のようなものにすぎない。」ステュアートいわく、信用について論ずる人々は、「信用とはつまり信頼である、ということでは彼らはみな一致しているが、その信頼が確固たる基礎に基づいていかに確立されるべきかを検討してはいない」(Steuart, *Works*, vol. III, 138. 訳, 218-9)。この「確固とした基盤」とは、商取引における法整備、裁判手続きの改革、財産の販売の簡易化、帳簿の信頼性、詐欺の防止と公正な取引の支援であり、為政者がこれを推進する必要がある。もしこのようなシステムが整備されれば、信頼は諸個人の財産の中にその基礎を見出すだろう。しかし、逆にも

しそうでなかったら、悲惨な結果となるであろう。「このような制度が確立されていない場合には、信用は流星のように見えるであろう。利口で悪賢い人々は信用を利用し、こうして富裕と繁栄についての黄金に彩られた計画で、世間の目を幻惑させるであろう。人類は勤勞へ飛躍し、信頼が確立されるであろう。しかし、このような信頼の限度を決定する方法が無いので、計画の張本人は幻想を利用して利得し、信頼は消滅するであろう。そして、すべては謎で夢であったと思われるであろう。」ダヴナントは信用に希望と恐怖の両方を見ながらも、まだ悲劇的な結末をみてはいなかった。そこから約 70 年後、結末を知っていたステュアートは、次のように問うた。「南海計画やミシシッピ計画は、信頼の濫用にほかならなかったのではないだろうか」（*Steuart, Works, vol. III, 139. 訳, 219*）。

このようにステュアートは、信用の本質が信頼にあることを示し、そのあとで、信頼のありかたによって銀行の信用を、私的信用、商業的信用、そして公信用の三つに分類する。私的信用は、元金と利子の支払いを補償するのに十分な動産または不動産の担保の上に成り立ち、これは三つの中で「最も堅固である the most solid。」商業的信用は、「借り手が貸付を受けた元本と貸付期間中の利子とを、取引にたいする誠実さと知識とによって契約どおりに返済しようという貸し手の信頼」に基づくものであり、これは三つの中で「もっとも不安定なものである」。そして公信用は、「元本の償還請求はできないが、利子のかわりに、あるいは元本の部分的消滅＜返済＞として、元本総額の一定割合を年々支払うという条件で借入をする、国家すなわち政治体にたいする信頼」に依拠している。ここでステュアートが指摘するには、これらの信用の種類の違いは、「借り手の状態」ではなく、「信頼の対象」と「担保の性質」だった（*Steuart, Works, vol. III, 189-91. 訳, 252-3*）。例えば、商業的信用が他の二つの信用と比べてより確立しにくいのは、そこでの担保が不安定であり、「評価や思惑 opinion and speculation」に依存しているからである。私的信用における信頼の対象は、「借り手の手中にある価値の実際の存在 the real existence of a value in the hands of the debtor」であり、公信用においては、「永続的な利子支払い」の基金であり、商業的信用では「借り手の誠実さ、能力、そして幸運」であった（*Steuart, Works, vol. III, 191-3. 訳, 253-4*）。

ステュアートは信用の原理としては上記のような三分類を考えるが、営業方法としては、「流通の銀行」と「預金の銀行」の二つに分ける。前者は、担保

をもとに銀行券を発行し、要求があれば銀行券と引き換えに担保の払い戻しをする。後者は、信用を銀行の帳簿上で移転し、発券は行わない。前者の典型はイングランド銀行であり、後者はアムステルダム銀行である。流通の銀行で、鑄貨を担保としている場合、それと発券の割合をどのようにすべきかという問題が生ずる。ステュアートによれば、これは経験によってのみ判断されるが、すくなくとも、銀行の資本は、「公衆－彼らは銀行の経営を見通すことはできないが、健全な信用を保証するために相当額の財産を担保にもっている人々が自分たちをたぶん欺かないだろうと進んで信じる－の信頼を確保することに」役立つ (Steuart, *Works*, vol. III, 204. 訳, 261)。逆に、そうした「公衆の側に信頼がいちじるしく欠けている」ところでは取り付けが生じることになるステュアートは指摘する (Steuart, *Works*, vol. III, 205. 訳, 262)。つまり、担保そのものではなく、それを管理する人への信頼が問題の本質となっている。

6. アダム・スミス

ステュアートは、アダム・スミス Adam Smith 以前に、『経済の原理』で最初の経済学体系を作ったと今日の経済思想史では評価されているが、スミスはパルトニー宛の手紙の中で、この書を、書名をあげずに批判したと言明しており、彼の策略通り経済学の歴史から消し去ったとされてきた¹⁰⁾。しかし、『国富論』第二編第二章で展開される紙券信用論の詳細を分析すると、スミスはステュアートの信用論から多くを学んでいたことがわかる。

スミスは 1762－63 年に行った二つの法学講義 (LJA, LJB) いずれにおいても、信用を、「国民の富裕」の増大にとって邪魔となる「死蔵物 dead stock」を減らす手段と考えていた。それは 1776 年の『国富論』においても同様であったが、そこではより経済学的な分析が加えられた。つまり、貨幣は流動資本であるが、「その維持が社会の純収入を減らす」それであり、したがって、これはより少なくするべきだと。そして、貨幣という流動資本の維持費は、金や銀を紙によっ

10) 「ジェイムズ・ステュアート卿の本については、わたしは貴兄と同意見です。その著作には一度も言及することなく、同書中の誤った原理は、わたしの著作ですべてはっきりとした明瞭な論駁に見舞われることになると自認しております。」(アダム・スミス「ウィリアム・パルトニー宛一七七二年九月三日」, 136)

て代替することによって減らすことができるという。スミスは、「この目的に最もよく適した」ものとして銀行券をあげる。彼は、その理由を次のように説明する。

「ある特定の国の民衆がある特定の銀行家の財産，誠実，慎慮を深く信頼し，いつでも提示されうる彼の約束手形にはつねに要求払いの用意があると信じているばあいには，そういう手形は，それとひきかえにいつでも金銀貨が得られるという信頼から，金銀貨と同じ流通性をもつようになる。」

(Smith, *Wealth of nations* (以下 WN と略)，1976, vol. 1, 292. 杉山訳『国富論（二）』，43)

法学講義において彼は紙券信用の説明に「信頼 confidence」という概念は用いてないし，またこの『国富論』の費用分析という極めて今日的な経済学の文脈においても，この用語，内容はその前後と異質である。これが，法学講義と『国富論』（1776 年）の間に刊行されたステュアートの『経済の原理』（1767 年）における信頼を本質とする信用論から学んだことであると考えるのは決して的外れではないだろうし，なによりも，スミスが，徹底した経済分析の中で，こうした非経済学的要素に触れずに自らの信用論を進めることができなかったということが意味するところは大きい。

スミスは，次に，具体的にこの銀行が発行する約束手形，つまり銀行券が，おもに「手形割引」，すなわち持ち込まれた手形に対して銀行券を貸し付けるというやり方で発行されていることを説明する。しかし，スコットランドでは，もう一つのやり方で信用が供与されているともいう。それが，キャッシュ・アカウントである。それは，「ある人が，確実な信用と十分な土地資産をもつ二人の保証人をたて，信用が与えられた一定額（たとえば二〇〇〇または三〇〇〇ポンド）の範囲内で前貸しされたどんな金額でも，要求がありしだい法定利子をそえて返済することを保証してもらえるならば，その人にそれだけの信用を与えるということである」(Smith, WN, vol. 1, 1976, 298. 杉山訳，53)。まず手形割引業務は，ステュアートの概念では，商業的信用であり，営業形態としては流通の銀行ということになるであろうし，スミスもそれは否定しないだろう。キャッシュ・アカウントについても，スミスは本質的には手形割引と同様，トレイドにたいして信用を供与するものであり，その点では同じものであると考えている。しかし，ここで注意すべきは，彼のキャッシュ・アカウントによる

信用供与では、手形割引と異なって、「確実な信用と十分な土地資産をもつ二人 two persons of undoubted credit and good landed estate」の保証人が必要だということである。「信用を与える giving credit」というときの「信用」は、貸出しを意味するが、この「確実な信用」はそうした具体的な経済的概念ではなく、評判のような、ステュアートのいう、もしくは先にスミス自身が使った「信頼」に近い意味をもつ。さらにいうと、ここでは土地資産もそれに並記されており、これはステュアートの信用の分類でいえば、私的信用に属している。

とはいえ、スミスは、銀行業の破綻を意味し、もっとも避けるべき事態である取り付けの原因は、この「信頼」という意味での信用の不足によるものとは考えず、紙券の過剰発行にあると考える。スミスは、トレードに必要な貨幣の量は決まっており、紙券の過剰発行によって、この必要貨幣量を上回る貨幣と紙券が出回ると、紙券が銀行に兌換請求をしに戻ってくる。これが集中し、銀行が保有する貴金属貨幣の準備では対応できなくなってしまう。そしてこの問題も、費用の問題として分析される。銀行は、この兌換準備について、まず、通常の支払い請求に対する準備を保持しておく費用があり、そして、もし支払い請求が増えて兌換準備を減らしてしまうような場合に、それを補う費用も必要になってくる。スミスが、紙券の過剰流通の際に増大することを懸念しているのは、この二つ目の費用であり、一度過剰流通が起きると支払い請求は増え続け、その分さらに準備金である貴金属貨幣を補充するのが困難になり、費用もその分増えることになるという (Smith, WN, vol. 1, 1976, 299-302)。スミスは、こうした事態を防ぐために、手形割引に対しては、元来手元に置いておかなければならない「手元現金 ready money」の分に限定し、キャッシュ・アカウントに対しては、一定の短い期間に、貸付と返済が同額になる範囲に限定すべきだという (Smith, WN, vol. 1, 1976, 304-305)。しかし、ここで注意すべきは、もしこれで問題がなければ、先に示したキャッシュ・アカウントを設ける際の条件、つまり「確実な信用と十分な土地資産をもつ二人」の保証人などという要件はいらぬはずである。つまり、スミスは、単なる費用分析や、紙券発行量の管理だけでは過剰流通の問題、ステュアートの言葉でいえば、商業的信用を「最も不安定」なものにしている問題を論じきることはできていない。したがって、最後のよりどころとして最初から、ステュアートのいう「信頼」を与えるものが必要だと考えていたことになる。

興味深いことに、スミスは、この過剰流通の原因は銀行家ではなく、あくまでも手形の振り出し、逆振り出しを繰り返す「企画家 projector」たちにあると考えている。彼らは、「真正の real 為替手形と擬制的な fictitious それの区別をすること」をできるだけ難しくすることが自分たちの利益になると考えた。銀行家はもしこの「非常に破滅的な状況」を見つけたら、こうした取引から徐々に手を引いていくだろう。けれども、企画家たちは、銀行家のこうした「思慮深く必要な抑制 prudent and necessary reserve」を、「国家の苦境」(Smith, WN, vol. 1, 1976, 312) だと考えた。そして、「無思慮な imprudent」スコットランドのエア銀行は、この「苦境」の原因を理解せず、真正手形か否かの区別はほとんどせずに手形割引を行っていた (Smith, WN, vol. 1, 1976, 313)。この銀行は二年以上にわたって、どのような手形も割引するという「あまりにも寛容な行為 too liberal conduct」を行っていたが、それでもその間業務が続行できた理由をスミスは次のように説明する。

「この銀行の株主たちの資産は数百万ポンドの値うちがあり、彼らがこの銀行の原証書すなわち原契約書に署名していたために、それは事実、銀行のすべての債務に応じるための担保になっていた。それほど大きな担保が必然的に与える信用によって、この銀行は、あまりにも放漫な経営にもかかわらず、二年以上も業務を続けることができた。」(Smith, WN, vol. 1, 1976, 314, 杉山訳, 84)

ここで、エア銀行の経営を維持した「信用」は、まさに株主の資産に対する信頼であり、先ほどのキャッシュ・アカウントの説明で登場したものに相当する。つまり、この商業的銀行ももし持ちこたえられたとすれば、ステュアートのいう私的信用における動産・不動産の担保によって得られた信頼がそれを可能にしたということになる。果たして、スミスが、このようなステュアートの信用論の原理をどこまで意識していたかはわからないが、実質的に、信頼によって支えられたものとしての「信用」が銀行制度を最後のところで支えていたと考えていたことはこの例によっても示されている。そして、注意しておきたいのは、スミスは、銀行の「思慮深さ」を信じていたが、かりにそれが裏切られるようなことがあっても、そもそも信用はある程度は信頼によって補えると考えていたということであるが、その一方で、「無思慮な」銀行家の行動がある限りはその信頼でさえも銀行の信用を支えきることはできなかったとも考えてい

た。ここまで見て来た名誉革命期以降のさまざまな信用に関する議論でも、その信頼を高めるものとして、組織を構成する人たちの思慮深さが取り上げられることはあったが、あくまでも信用を成り立たせているのは、人びとの組織にたいする信頼にあるともいえた。しかし、この信頼は結局のところ、銀行の内外でそれにかかわる人間の思慮深さ、名誉、正直さという要素に支えられていたし、そのことはあらゆる論者が十分に認識し、信用を論ずる際の最重要関心事であったことを忘れてはならない。

むすびにかえて

1694 年に、今日と同じ原理にもとづいて信用創造をするという意味での最初の近代的な商業銀行、イングランド銀行が設立されたところから¹¹⁾、1776 年に『国富論』でアダム・スミスが銀行業務の仕組みと意義を経済理論として明確に描き出すまでのあいだ、ブリテンでは多くの論者が、銀行はいかにあるべきかということを論じてきた。この期間には、1720 年のイギリス、フランスそれぞれにおける深刻な金融危機があり、その前にも後にも耐えることなく生産された無数の銀行設立案やイングランド銀行の在り方をめぐる議論は、常に過去の議論を認識し、課題を継承し、多くの場合、誰、またはどの著作に対する批判または擁護なのかを著者名や著作名を明確にした形で論争が展開されてきた¹²⁾。

現代のイギリス史研究においては、P. G. M. Dickson が 1967 年にその著書、『イギリス財政革命 *The financial revolution in England*』で、イングランド銀行の業務の意義を財政という視点から浮き立たせ、John Brewer が 1989 年に「財

11) 最近では、初期近代ヨーロッパの多角的決済システムの「中心における預金振替銀行と、中心と周辺を結びつける広範な引受信用のシステム」(楊枝 2004, 106) に近代の銀行制度の誕生を見るべきであり、そうした決済システムを前提としたうえでの債権債務関係に信用貨幣の創造をみいだす考えが、内生的貨幣供給論者のなかで強くなってきている。このとき、近代的な銀行業の範型はイングランド銀行ではなくアムステルダム銀行になる。楊枝 (2004; 2012; 2022) を参照。

12) 本稿の本文中においては、論争における議論の継承の在り方について十分には論ぜられなかったが、本稿末尾にある一次文献のタイトルを見ただけでも、そのようすをうかがうことはできる。つまり、しばしば、タイトルの中で、その論考が、誰のどの著作に対して、どんな見解を持っているのか簡明に示されている。

政軍事国家」という概念を用いて、イギリスにおいてはフランスと比べてより効率的で確かな収税制度が財政革命を可能としたことを明らかにし、金融・財政システムの確立が大英帝国繁栄の礎となったことがあきらかにされてきた。しかしその一方で、そもそも貨幣とはなんなのか、その新たな形態である銀行券を生み出す銀行とはなんなのか、どうあるべきかということをめぐるこの時期に延々とつづいた議論については置き去りにされたままになっていたように思える。言葉の戦い、論争という形で途絶えることなく、貨幣や銀行をめぐる議論が続けられてきたということは経済思想史という視点からは見過ごすことのできない大きな意味を持つし、人々がどのような社会をつくりだそうとしてきたのかということがそこからは明確に読み取れてくる。本稿では、それを読み解いてきた。そこから見えてきたことは、この17世紀末からスミスの『国富論』までの貨幣や信用をめぐる議論を通じて諸論者が求めたものは、単なる信用の拡大のための制度の誕生・拡充ではなく、なによりも安全な銀行制度の確立であり、しかもそれは銀行という組織を構成し、実務にかかわる諸個人の道徳性、それへの信頼によってしか可能でないと彼らは考えていたということであった。

しかし、たしかに1720年の金融危機は深刻ではあったものの、それより前から、そもそも1720年の危機を予感しその防御策をあらかじめ考えていたかのような議論を当時のブリテンのパンフレッティーアは行っていた。なぜそのようなことができたのか、またなぜそうしたのか。この問いへの答えのヒントを探ることでこの論考を終えたい。

ヒントは、歴史、正確に言うと、この時代の人びとにとっての歴史の中にある。中世の秩序が崩壊し、社会はどこへ向かうともわからないまま変動し続けており、ホッブズが示した恐怖に満ちた世界がそこにはあった。その後近代資本主義というものが新たな秩序になっていくことを知っているわれわれは忘れがちかもしれないが、それは不安定で、危機感に溢れ、先行きが見えない、懷疑主義の時代であった。これは、哲学的にはポスト・モダンと言われ、経済的にも政治的にもあらゆる不安定性と脆弱性が露呈し続ける時代に生きるわれわれにはむしろ容易に想像できるかもしれない。そうした懷疑主義に満ちた17世紀の末に「信用 credit」を「希望 hope」と「恐怖 fear」という言葉で表現したダヴナントの世界観を構成していたのは、ホッブズ、マキャヴェリ、リシュ

リユー枢機卿のそれであった。ダヴナントはさきにも見たように、信用を支えるものは最終的には為政者の能力、それを支えるための政治算術であるが、それは叡智という徳であり、それは知識であり、なによりもそれを正直に伝えることが必要であると考えていた。それは、他の銀行設立諸案で、その銀行の運営をつかさどる人間の確かな道徳性が求められたのと質的には同じ発想であった。ダヴナントも数多の銀行設立提案者たちも共通して主張したのは信用制度の必要性であり、それなしでは今後のトレイドの展開はないということであった。しかし他方でもう一つ共通していたのは、その信用という有益な制度は、根底ではそれを支える個人の道徳性や能力がなければ、そしてそれによって構成される信用制度への信頼がなければ存在、存続できないという主張であった。つまり、いかに有益で必要不可欠な制度であっても、それを支える諸個人の道徳性とそれによって支えられる制度そのものへの信頼なしには存立も維持もできないとそもそも提案の時点で彼らは考えていた。これは設立後に制度の脆弱性が発覚して後付けで唱えたことではない。1720 年が企画家たちを覚醒させたのではない。そもそも彼らの思想の出発点に、そうした発想があった。それは、その時代の産物としての多くの政治思想文献の中に見いだされ、それらの文献はさらに過去の思想からの学習の成果でもあった。

為政者は正直な助言を採用しなければならず、お世辞を排除しなければならないというダヴナントの政治算術は、フランスのリシュリユー枢機卿が自らが亡くなる前の年、1641 年に書いて、世紀末になってアムステルダムで活字となって出版された『政治的遺言 *Testament politique*』から、そこで用いられた言葉を含めて学んだものであった。ただ、ダヴナントは、マキアヴェッリもその名をあげながら、そうした自らの発想のもう一つの源泉として言及していた。『君主論』第二十二章で論じられた秘書官がどうあるべきかについて、第二十三章のいかに君主が追従者を逃れるべきかについての論述は、リシュリユーの『政治的遺言』と並んで、ダヴナントの政治算術の発想そのものであった (Ito 2011)。

そもそもこの時代の政治思想の基礎には、古典古代の、そしてフィレンツェのルネサンスで復活した徳論があった。初期近代ブリテンでは、諸個人の道徳性に依拠し、とくに統治者のそれにとづいてこそ良き統治ができるという古典古代からの政治理論が広く参照されていたが、アダム・スミスの登場は、交

換的正義さえ守られていれば富裕の進歩はみられるのであり、それ以外の徳は二の次であるというパラダイム・シフトをもたらした（田中 1988；田中 2003；Haakonsen 1981）。こうした視点は、Hont & Ignatieff 編集の『富と徳』（1983）やその著者たちの研究による経済思想史の成果でもあった¹³⁾。しかし、本稿で見て来たような信用という新たな制度を作り上げようとする人々の議論を見ると、スミスに至っても、少なくとも信用制度に関しては、結局のところそれをうまく機能させるための鍵は、それを動かす構成員ひとりひとりの能力と道徳性に依存していると考えられていたことがわかる。しかし私がここで注意しておきたいのは、少なくとも信用という問題を論ずるとき、こうした制度と個人の議論を、これまで 17, 18 世紀の政治史、政治思想史で語られてきた徳論とそれをめぐっての政治論争の文脈に無理に入れ込むべきではないということである。この時期の政治史、政治思想史は長い間常に、トーリー対ウィッグ、カントリ対コート、地主利害対貨幣利害のような二項対立図式で語られ、またあらゆる事象をそこにおさめようとしてきた。例えば、J. G. A. Pocock の徳 (virtue) 論、またはシヴィック・ヒューマニズム (civic humanism) という範疇も上記の二項対立のどちらに着くかという視点から利用されてきた¹⁴⁾。しかし私があえて古典古代以来の特定の語彙範疇を示す徳 virtue という言葉を使わず、道徳性 morality というより一般的な言葉を用いたのは、この時期のブリテンには、用語の出自がどこであれ、安定した政治制度、経済制度を作っていくうえで国家や団体でなく、最終的には個人の能力、道徳が有効に機能することが必要不可欠である、そのような考えが根底にあったように思えたからであり、それは古典古代以来の徳という狭い範疇だけにはおさまらないものであったからである。それは政治史研究者たちが好んで描くさまざまな形の二項対立図式を超越していた。そしてこれこそ、この時代の人々がルネサンスや古代という過去から学んだ考えであった。

こうした視点から、以下では、この時代の人々が、どのような政治体制であれそれがうまく機能するのはそこにいる諸個人の道徳性に依拠していると考え

13) スミス研究の動向については伊藤 (2012) を参照。

14) H. T. Dickinson はカントリー・イデオロギーを次のように説明している。‘The notion that civic virtue depended upon the possession of land and that political power was rooted in property was accepted by all the elements of the Country interest’ (Dickinson 1977, 103).

ていたことを示すいくつかの例を、この時代読まれた過去の文献の中に見出したい。ダヴナントを含む初期近代ブリテンの思想家はマキアヴェッリの『君主論』のみならず『ディスコルシ』をよく読んでいた。前者は政治をつかさどるものについて君主制に特化して、君主のあるべき姿を描いたが、後者では貴族制と民主制に焦点をあてた。マキアヴェッリは『ディスコルシ』で、リウィウスの『ローマ建国以来の歴史』から読み取ることによって、各政体のあるべき姿を論じたが、そこで彼はローマが誕生して間もないタルクィニウスの時代とカエサルを比較し、「タルクィニウスの時代では、ローマ人民はまだそれほどまでに墮落しきっていなかったのに対し、カエサルの時代では、中身から腐りきってしまったという違いがある」という。そしてマキアヴェッリの“現代”を後者になぞらえて、次のように言う。「天地がひっくり返るような大騒動が持ち上がって見たところで、ミラノやナポリが二度と自由を掌中にすることはありえない。それというのも、両国民が芯から腐りきっているからである。」そして次のように結論付ける。「人民が健全でありさえすれば、どんな騒動や内紛が起こったところで、損なわれるようなことはない。けれども、人民が腐敗していれば、どんなに法律がうまく整備されていたところで、何の足しにもならない。」そしてここでは最後の選択肢として君主制さえ引き合いに出す。「最高権力を持った一人の人物が出て、人民が健全になるように、法律を守らせるよう舵をとらぬ限り脈はない。」しかし、さらに続けて言うには、こうした人物が「高齢まで長生きして、長年にわたって政務を執りうるか、さもなければ、二代続いて名君が現われて統治することでもない限り、…支配者が死んでしまうと、すぐに破壊へと逆戻りしてしまうものである。」(マキアヴェッリ『ディスコルシ』, 107-9) 結局のところ、人民であれ君主であれ健全な政治道徳を保持すること以外に自由を維持する策はないということになる。こうした市民道徳論はポーコックのいうシヴィック・ヒューマニズムの典型的な描写でもある。

しかし本稿の視点から注意したいのはその先の議論である。マキアヴェッリは、リヴィウスによる、ローマ人のウェイイへの移住をめぐる議論から、二つの教訓を引き出す。「第一は、平民は多くの場合、うわべの立派さに幻惑されるあまり、結局は自分の破滅につながるようなことでも望むものだ」という点、「今一つの点は、人民の信頼を勝ち得ている人物が事の良否を人民にとき

あかしてやらない限り、国家はどんな危機や災難に見舞われるか知れたものではないということである。」そして、次のように付け加える。「よくあることだが、かつて何かの事件とか人間に騙されたために、人民がもう何も信用しないような傾向になってしまうと、その国家の破滅は避けうべくもないのである。」マキアヴェッリは、人民を納得をさせ、信頼をうるための方策を示すとき、人民のこの「うわべ」に騙されやすいという特徴から説明する。「人民を納得させようと思えば、まず彼らの目の前に、損か得か、勇ましく見えるか、または臆病に見えるか、ということとを並べ立ててやらなければならない。人民の目の前に提示された事柄が、たとえその背後に損失が隠されているにせよ、うわべは誰の目にも利益を約束しそうな話であれば、大衆の首をたてにふらせることなど、いつに変わらず簡単しごくのことなのである。」そしてマキアヴェッリは、ローマの人民を、「勇ましい意見を前にすると思慮分別を忘れてのぼせあがる」、と描写する。さらにくわえて、アテナイにおいては、「深謀遠慮のニキアスは、シケリア遠征が必ずしも得策ではないことをアテナイ市民に説得これつとめたが、とうとうその了解は得られなかった」（マキアヴェッリ『ディスコルシ』、233）という例が示される。マキアヴェッリは、人民は勇ましさには説得させられるが、思慮深い判断は理解できない、と考えていた。このようにマキアヴェッリは、国家の政策の遂行には人民の信頼を得ることが必要であるが、その人民の判断力に疑いを持っていた。逆に言うと国家の行方は人民が思慮深くあるかどうかにかかっていると考えていたといえる。本稿で見てきた信用をめぐる議論と同じ構図になっている。

このマキアヴェッリも取り上げた古代アテナイのシケリア遠征の例は、17、18世紀ブリテンにおいて多大な影響力をもっていたトマス・ホッブズが若いころにギリシャ語から英語に翻訳したトゥーキュディデースの『戦史』で描かれたものであった。

アテナイの遠征指揮官に選出されたニーキアスは、そもそもがシケリア全島を得ようなどとすることは誤った判断だと考え、演壇から市民に次のように忠告した。「船隊派遣がはたしてとるべき道か否か、これを充分に見究めるべきであり、重大な作戦を議するに、かくも軽々しく他国人の甘言に惑わされて思慮を誤り、本来われらの関与するべきではない戦争を始めることがあってはならぬと思う。もとより私個人の立場から言えば、今回の任務は名誉なこと

あるし、また、一身の生命財産を慮ることが市民の義務に反すると言うわけではないが、私の場合、とくに身の安否におびえて汲々としているわけではない。むしろ、己の安否を恐れる市民こそポリスに益するところが大有りえよう。自分を救うことを願って、国事の安泰を求めるからだ。」(トゥーキュディデースの『戦史』下、30-1)

このようなニーキアースの演説に対しても民衆は聞く耳を持たず遠征はなされた。しかし、敗色が明らかになってきたシケリアのアテナイ勢の指揮官としてニーキアースは、退却の決意がしきれなかったが、その事情をトゥーキュディデースは次のように描いている。「内心はまだいずれとも決心がつかず、進退の是非を計りわけながら、決定を遅らせていたのであるが、この時はかれは、軍勢撤退に反対の態度を表明していた。アテナイ本国の決定をまたずして撤退すれば、必らず自分たちの行動が本国で咎めを受けることを、自分はあまりにもよく知っている。なぜかといえば、われらの行為の是非について、裁きの票を投ぜんとする市民らは、われらとは立場を異にする。市民は事実の目撃者ではない、ひとがあれこれと批評するのを聞いて意見をこしらえあげる。そして言葉たくみに中傷する者があれば、たちまちその言を鵜のみにして信じこむ手合いである。」(トゥーキュディデースの『戦史』下、194) ここで描かれたのは、根拠のない言葉に惑わされる市民の愚かさであり、そうしたものへの將軍ニーキアースの戸惑いと恐れである。

今日にいきるわれわれは、民主主義の正当性を声高に叫びながらもポピュリズムの罠に陥り、何度となく金融危機を繰り返しそれを分析して原因を知りながらもさらに繰り返す同じ過ちの信頼のシステムを作り上げる。結局のところいかなる制度もルールも事に当たる人間ひとりひとりの道徳性とそれに基づく適切な判断力がなければ結局のところ失敗する。これは古典古代からすでに語られていたことであり、われわれが生きている近代の金融制度をつくる最初の時点でも語られていたことであった。われわれは、いつしか、個人の道徳性はなくとも自由な行動をしていれば、そして投票にさえ行けばすべてがうまくいくという「経済学」や「民主主義」の免罪符を手にし、そうした制度への信頼を疑うことは決してしようとししない。しかし、歴史は、そうした現代人の高慢、慢心をあざ笑うかのように本当のことを語っているように思える。

参考文献

本報告のもとになった学会報告原稿

- (1) ‘Quest for a ‘good’ fund – a prelude to the land-bank controversy’, 3rd ESHET-JSHET meeting, University of Corsica, Corte, France, 2012 年 9 月 14 日。
- (2) ‘Continuity and discontinuity – the early stage of the land-bank controversy’, The 23rd Conference of the History of Economic Thought Society of Australia, the Discipline of Economics, Faculty of Economics and Business, University of Sydney, 2010 年 7 月 7 日。
- (3) ‘What was the issue in the land-bank controversy?’, The 17th Annual Conference of the European Society for the History of Economic Thought, Kingston University London, United Kingdom, 2013 年 5 月 17 日。
- (4) ‘Land-bank projects after the establishment of the Bank of England’, 4th ESHET-JSHET joint conference, Otaru University of Commerce, Otaru, Japan, 2015 年 9 月 11 日。
- (5) ‘The Land Bank United, a failed project in 1696’, The 22th Annual Conference of the European Society for the History of Economic Thought, Madrid, Complutense University of Madrid, 2018 年 6 月 9 日。
- (6) ‘Charles Davenant’s idea of credit’, The Conference of the History of Economic Thought Society of Australia, University of Sydney, 2019 年 10 月 4 日。
- (7) ‘John Law’s idea of bank and his contemporaries’, The 26th Annual Conference of the European Society for the History of Economic Thought, Liege, Belgium, HEC, Universite de Liege, 2023 年 6 月 3 日。
- (8) ‘British discourses on banking around 1720’, The 27th Annual Conference of the European Society for the History of Economic Thought, Graz, Austria, University of Graz, 2024 年 5 月 9 日。
- (9) ‘Adam Smith on banking’, The Conference of the History of Economic Thought Society of Australia, Melbourne, 2022 年 9 月。
- (10) 「「信用」は「貨幣」のあとにくるのか？」日本英文学会第 93 回大会, シンポジア第 3 部門「信用文化と英文学」, Zoom ミーティング, 2021 年 5 月 22 日。
- (11) 「18 世紀イギリスにおける ‘credit’ の論じられ方－思慮深さと制度－」日本イギリス哲学会関東部会第 109 回研究例会, 中央大学, 2022 年 7 月 24 日。

〔一次文献〕

（本稿では直接触れなかったが、上記の私の学会報告原稿で言及したものを含む）

草稿類

British Library

Anonymous, ‘Remarks on Mr John Asgill’s book dated a Lincoln’s inn in September 1696’, 1690, Harley MS 6385.

[Hugh Chamberlen], ‘The Discourse which some time since past concerning a proposal to Employ the poor and repair the Highwayes resolves into this question, Whether Bills of Credit upon a sound and good Fund might not be of equal use with money of gold, silver, etc.’ [1690], Harleian Mss. 6838, ff.93-7.

Killigrew, Sir William, ‘Letters to Lord Danby’, Egerton MS 3351, ff. 100, 113, and 136, 1674.

信頼と道徳性～18 世紀ブリテンの銀行設立案で最も求められたもの

Killigrew, Sir William, 'Letter to Hon. P. Bertie', Egerton MS 3351, f. 155, 1675.

The National Archive

Killigrew, Sir William, 'Note of observations touching a proposal by Sir William Killigrew and others about...', 1663 Aug 13, LRRO 37/36.

Senate House Library, University of London

The National Land-Bank, *Minutes of the National Land-Bank. 1695-6*, MS.61.

Davenant, Charles, *A Memorial Concening a Council of Trade*, Manuscript No.60, 1695 or 1696.

Davenant, Charles, *Essay on Publick Virtue*, Manuscript No.60, 1696.

Guild Hall, London

Anonymous, *Drapers Hall, October 11th 1695. We shoves names are hereunto subjected ...*, 1695, Br.19137.

[Asgill, John and Barbon, Nicholas], *The Monthly Account of the Land-Bank, No. 1*, August 1695, B.20136; *No. 2*, 3 September 1695, B.22.110; *No. 4*, 5 November 1695; *No. 6*, 7 January 1696.

London Metropolitan Archives

Dr. Chamberlen and Mr. Murray, 'Articles of Agreement between the Mayor and Court of Common Council [of London]', August 29, 1682.

Robert Murray, 'The Humble Proposal of Robert Murray for the Benefit and Satisfaction of the City Orphans'. April 27, 1691, MMSS/002.

National Library of Scotland, MS.Adv.31.1.7.

Anonymous, *Observations on the Land-Bank Settlement*. [1695.] Advocates' Manuscripts, fo. 105, 2.

Anonymous, Papers concerning the foundation of the Bank of England. 1682-96, Adv. MS. 31.1.7.'

Anonymous, [begins] 'Proposed that the Parliament doe establish a fund ...', November 4, 1691. Adv. ff.79-80. Endorsed Title: Proposal for a fund of current Property.

[Asgill, Barbon and Briscoe], *A scheme for a National Land-Bank*. ([1696.]), MS.Adv.31.1.7. 368.

Grey, Henry, 'To the King's and Queen's ... Majesties. Incouraging Proposals in Order to the Raising of moneys for carrying on the present war against the French November 17, 1693. 4 pp. and Summary and Answers to Queries. Adv. ff. 54-61.

Lowndes, William, 'Remarks upon the Proposals for Establishing a fund to Raise two Millions ... on a Revenue of £110,000 and by Bills'. December 13, 1691, Adv. ff.75-7.

[Paterson, William?], [begins] 'That an Act of Parliament be passed to Incorporate, by the name of the Directors and interested in the English banck ...', [1694?], Adv. fo. 166.

刊行物

Anonymous, *A description of the office of credit; by the use of which, none can possibbly sustain loss, but every may certainly receive great gain and wealth*, London, 1665.

Anonymous, *A Proposal for the raising the summe of two hundred thousand pounds or more per*

annum as a fund or security : for advancing moneys for the service of the government with great ease to the subject, [London : s.n], [1690].

Anonymous, *The Proposal for the fishery-stock*, 1692, A.9.1.15(3), 7-8.

Anonymous, *A Proposal to raise a million of money by credit on a publick bank*, [S.l : s.n], [1692?].

Anonymous, *An Answer to a late pamphlet intituled A short abstract of Dr. Chamberlen's proposal, &c.*, [London : s.n], [1694].

Anonymous, *Proposals for supplying the government with money on easie terms, excusing the nobility and gentry from taxes, enlarging their yearly estates, and enriching all the subjects in the kingdom / by J. Briscoe ; with a suplement [sic] to his Explanatory dialogue thereupon*, [s.n.], 1694 [1695], London. [2] (By J. Briscoe' [actually a parody – see Horsefield (1960), 183-6].).

Anonymous, *Proposals humbly offered to the Parliament, for supplying of the King with present money without interest, : whereby he will be better inabled to carry on a vigorous war against France); for the great ease of the subject: for the advance and encouragement of trade: and, for the raising of the price of land.* [S.l : s.n, 1694].

Anonymous, *Advertisement. The Projectors of the Money-Bank, ...*, 1695?.

Anonymous, *An Argument proving that the reason given by the directors of the Bank of England against settling any other bank*, [London? : s.n], [1695].

Anonymous, *Some seasonable memorandums to supply the present want of money*, London? : s.n, 1695.

Anonymous, *The freeholder's answer to Mr. John Briscoe's proposals*, 1695.

Anonymous, 'A letter from a citizen of London to his friend in the country : concerning the land bank, established by a deed of settlement enroll'd in Chancery; and the land bank proposed to be established by Mr. Briscoe / (Signed C.D.)', London, 1695? [i.e. Asgil and Barbon?], [1695], Guildhall (PB) Closed Access Bside 22.104.

Anonymous, *A new ballad upon the Land-Bank: or credit restore*, [London], [1695?].

Anonymous, *Some observations upon the Bank of England*, London, 1695.

Anonymous, *A Bank Dialogue between Dr. H. C. and a Country Gentleman.* [London, 1696] ([1695] according to Horsefield).

Anonymous, *A Casual Discourse about Banks, between a Brigadier, a Lawyer, a Merchant, and a Goldsmith*, [London], [1696].

Anonymous, *The commission for taking subscriptions to the National Land-Bank*, [London : s.n], [1696].

Anonymous, *An Essay upon the Necessity of Raising the value of Twenty Millions of Pounds at least, in either bills, bonds, tickets, or tallies of credit, according to Dr Chamberlin's method; in order to enable the King to carry on the war with France, and to pay off all anticipations, to promote trade, ease the nation of taxes, discharge mortgages, encourage a general fishery, employ the poor, relieve prisoners, lower interest, and make good the loss by clipt-money*, London, [1696] ([1695] according to Horsefield).

Anonymous, *Reasons for encouraging the Bank of England : I. In respect of justice and common right, II. Of its usefulness and the publick good*, [London?], [1696?].

Anonymous, *Reasons humbly offered against the clause intended in the act for the establishing the Land-Bank for denizing or naturalizing of all aliens that shall subscribe 500. l to the said bank*, [London : s.n], [1696].

- Anonymous, *A second Discourse about Banks; between a Brigadier, a Lawyer, a Merchant and a Goldsmith*, [London], [1696].
- Anonymous, *An Overture for supplying the present scarcity of money*, [N.p.], [1705].
- Anonymous. *Two overtures humbly offered to his grace John Duke of Argyll, her majesties high commissioner, and the right honourable the estates of Parliament. The 1. for supplying the present scarcity of coyn, and improving trade. The 2. for clearing the debts due by the government to the army and civil list*. N.p., [1705].
- Armour, James, *A proposal to supply the defect of money, and relief to the poor*. N.p., [1700?].
- Armour, James. *A premonitor warning: or advice, by a true lover of his country, unto all whose hands this may come*. N.p., 1702.
- Asgill, John, *Several assertions proved in order to create another species of money than gold and silver*, [London : s.n], [1696].
- [Asgill, John], *Remarks on the proceedings of the commissioners for putting in execution the act past last sessions for establishing of a land-bank*, London, 1696.
- [Asgill and Barbon], *A list of the names of the subscribers to the Land-Bank*, 23 July, 1695.
- [Asgill and Barbon](according to Horsefield), *An Account of the Land-Bank, shewing the design and manner of the settlement; the profits to the subscribers; the advantage to the borrowers; the conveniency to the lenders; that it will be the support of the nobility and gentry of England, and a publick good to the whole nation*. [By H. Chamberlain?] (according to BL Catalogue) [London, 1695?].
- [Asgill and Barbon], *A Proposal for a subscription to raise one hundred thousand pounds for circulating the credit of a landbank*, [London], [1695].
- [William Atwood], *A safe and easy method for supplying the want of Coin, and raising as many millions as the occasions of the publick may require. Humbly offered to the consideration of the present Parliament. With some remarks upon the Bank of England, Dr. Chamberlain's Bank, the Land-Bank, so called, and the National Land-Bank*, London, 1695.
- BANK OF ENGLAND, *An abstract of the charter to the Governour and Company of the Bank of England*, [27 July 1694].
- Benbrigge, John, *Usura accommodata, or, A ready way to rectifie usury*, London, 1646.
- Briscoe, John, *A discourse on the late funds of the million-act, lottery-act, and Bank of England*, London, 1694.
- Briscoe, John, *A discourse on the late funds of the million-act, lottery-act, and Bank of England*, 2nd version, 1694, London.
- Briscoe, John, *An explanatory dialogue of a late treatise, intituled, A discourse on the late funds of the million-act, lottery-act, and Bank of England*, 1694, London.
- Briscoe, John, *Advertisement. I have been desired by some Gentlemen ...*, [1695].
- [Briscoe, John], *A list of the names of such of the subscribers of land and money towards a fund for the National Land-Bank*, [1695].
- Briscoe, John, *A list of names of the subscribers of land and money towards a fund for the National Land Bank*, [1695].
- Briscoe, John, *An account of the National Land-Bank*, [1695].
- Briscoe, John., *An account of the value of the estates in the several counties subscribed towards the*

- fund for a National Land-Bank, from Thursday the 11th of June, to Saturday the 13th of July, 1695, 1695.*
- Briscoe, John., *An account of the value of the estates in the several counties subscribed towards the fund for a National Land-Bank, from Thursday the 11th of June, to Saturday the 3d of August, 1695, 1695.*
- Briscoe, John, *The following proposals for; and accounts of, a National Land-Bank*, Edinburgh, 1695.
- Briscoe, John, *Mr. Briscoe's reply to a pamphlet intituled, The freeholders answer to Mr. John Briscoe's proposals for a national bank.* [London : s.n], [1695?].
- Briscoe, John, *Reasons humbly offered for the establishment of the National Land-Bank* [London?], [1695?].
- Briscoe, John, *The Freehold Estates of England, or England it self the best Fund or Security*, London, [1695].
- Briscoe, John., *To the Honourable the Knights, Citizens and Burgesses in Parliament assembled.* (A short account of the National Land-Bank.) [Dated: 2 Dec. 1695.], London, 1695.
- Briscoe, John, *To the Lords spiritual and temporal and Commons in Parliament assembled : may it please your honours, the last sessions of Parliament I presented you*, [London : s.n], [1695].
- [Briscoe, John], *The names of 51 persons chosen the 10th of September 1695, at Drapers-Hall in Throgmorton-street, for a committee to consider of proper methods for settling and establishing a National Land-Bank*, [London], [1695].
- Chamberlen, Dr. Hugh, *Dr. Hugh Chamberlen's Proposal to make England rich and happy*, 1690.
- Chamberlen, Dr. Hugh, *An Humble Proposal to the Honourable the House of Commons*, 1690.
- Chamberlen, Dr. Hugh, *A proposal for encouraging of persons to subscribe towards a common stock of [blank] for the erecting and managing of a trade by a general fishery*, [London : s.n], [1691].
- Chamberlen, Dr. Hugh, *Some few considerations, supposed useful; concerning the vote of the House of Commons, Friday the 24. February upon the bill, for hindering the exportation of Gold and Silver; and the melting down of the coin of this Realm, humbly Proposed by Dr. Hugh Chamberlain; to the Wisdom of the Honourable House of Commons*, London, 1693.
- Chamberlen, Dr. Hugh, *Dr. Chamberlen's petition, and proposals for a land-bank to increase trade. : Humbly offered to the honourable House of Commons December 1693. ...* [London : s.n], [1693].
- Chamberlen, Dr. Hugh, *To his Grace William Duke of Hamilton their Majesties High Commissioner and the Honourable Estates of Parliament, The following Considerations and Proposals are humbly presented by Dr. Hugh Chamberlen*, [London]. [1693].
- Chamberlen, Dr. Hugh, *Papers relating to a bank of credit upon land security : proposed to the Parliament of Scotland*, Edinburgh, 1693.
- Hugh Chamberlen, *A reply to a pamphlet called Observations on the Bank of England*, London, 1694.
- [Hugh, Chamberlen], *A Rod for the Fool's-Back, or, Dr. Chamberlin and His Proposal Vindicated, from the Foul Aspersions of a Dirty Scurrilous Scribler, who pretends to Answer the Paper of the Comparison, between the Doctor's Proposal, and Mr. Briscoe's*, London, 1694.
- Chamberlen, H.A., *A short abstract Doctor H. Chamberlen's proposal to the honourable House of Commons the last sessions. And also of Mr. John Briscoe's present printed proposal compared together*, Oxford, [1694].
- Chamberlen, H.A., *Some useful reflections upon a pamphlet called A brief account of the intended*

- Bank of England*, [1694].
- [Chamberlen, Hugh], *A Bank dialogue, or, Docor Chamberlen's land-bank explained, by way of question and answer*. 1695.
- Chamberlen, Hugh, *A Brief Narrative of the Nature, & Advantages of the Land-Bank, as proposed by Dr Hugh Chamberlen, the first author of founding a Bank on an annual revenue*, [London], [1695].
- Chamberlen, Hugh, *A proposal by Dr. Hugh Chamberlain in Essex-Street, for a bank of secure current credit to be founded upon land : in order to the general good of landed men : to the great increase of the value of land and the no less benefit and augmentation of trade and commerce*, London, 1695.
- Chamberlen, Dr. Hugh, *A supplement to the Proposal for a general fishery, explaining the nature and benefit of the fund proposed for the same*, [London : s.n.], [1695?].
- Chamberlen, Hugh, *The Several Articles or Parts of the Proposal upon Land-Credit, rationally explained*, London, 1695.
- Chamberlen, Dr. Hugh, *An Answer to a Libel entituled, a Dialogue between Dr. H. C. [i.e. Hugh Chamberlen] and a Country-Gentleman*, London, 1696.
- Camberlen, Dr. Hugh, *Some Remarks upon a late Nameless and Scurrilous Libel, entituled, a Bank-Dialogue between Dr. H. C. and a Country-Gentleman. In a letter to a person of quality*, London, 1696.
- [Chamberlain, Hugh?], *The Office of Land-Credit, Encouragement to Mony'd Men*, [London], [1696?].
- Chamberlen, Hugh, *A present remedie for the want of money: or, Some remarks, upon a paper; entituled an Overture for supplying the present scarcity of money; with a defence of a former; which seems very much preferable to it, and is now by order of Parliament under the consideration of the right honourable the Committee for examination of accompts*. N.p., [1705].
- Chamberlen, Hugh, and Scotland. Parliament. *Proposal, by Doctor Hugh Chamberlen, for a land credit, presented to the Parliament, by the Committee, to whom it was referred to be considered*, N.p., [1705].
- Chamberlen, Hugh, et al. *Proposals by Doctor Hugh Chamberlen, and James Armour, for a land-credit*, N.p., [1705].
- Chamberlen, Hugh, *Some animadversions upon a few small circumstantial differences, betwixt the proposal for a land-credit, reported to be Mr. Law's, and Dr. Chamberlens, both of them plainly agreeing in the foundation, as they are contained in the 6 and 7 chap. of a book, intituled, Money and trade considered, &c.*, N.p., [1705].
- Davenant, Charles, *Discourses on the publick revenues, and the trade of England*, London, 1698.
- Davenant, Charles, *The Political and Commercial Works of that Celebrated Writer Charles D'avenant, LL. D./Relating to the Trade and Revenue of England, the Plantation Trade, the East-India Trade, and African Trade*, collected and revised by Sir C. Whitworth, in 5 vols, London, 1771.
- Davenant, Charles, *Two manuscripts by Charles Davenant*, Baltimore: The Johns Hopkins Press, 1942, with an introduction by Abbott Payson Usher.
- Dymock, Cressy, *A discoverie for division or setting out of land, as to the best form published by Samuel Hartlib, Esquire, for direction and more advantage and profit of the adventurers and planters in the fens and other waste and undisposed places in England and Ireland ; whereunto are added some other choice secrets or experiments of husbandry, with a philosophical quere*

- concerning the cause of fruitfulness ; and an essay to shew how all lands may be improved in a new way to become the ground of the increase of trading and revenue to this common-wealth*, London, 1653.
- E.W., *A speedy way to supply Their Majesties occasions*, [London : s.n], [1694].
- Killigrew, Sir William, *A proposal shewing how this nation may be vast gainers by all the sums of money given to the crown without lessening the prerogative humbly offer'd to the King's Most Excellent Majesty, the Lords spiritual and temporal, and to the knights, citizens, and burgesses assembled in Parliament by William Killigrew ; to which is prefix'd the late Honourable Sir James Sheene's letter on the same subject, and the proposer's answer*, London : s.n., 1663.
- Killigrew, William Sir, [A proposal shewing how the nation may be vast gainers, etc.] *To the King and Queens most excellent Majesties ... An humble proposal shewing how this nation may be vast gainers, etc.* [Signed at end: William Killigrew.], [1689?].
- Killigrew, Sir William, *To the King and Queens Most Excellent Majesties, the Lords spiritual and temporal, and to the knights, citizens, and burgesses assembled in Parliament : an humble proposal shewing how this nation may be vast gainers by all sums of money given to the crown, without lessening the prerogative*, [London : s.n], [1690].
- [Mackworth, Sir H.] *England's glory; or, the great improvement of trade in general by a royal bank or office of credit to be erected in London*, 1694 [Sometimes attributed to William Paterson].
- Land Bank, *Land-Bank, Exeter-Change : a list of the names of the subscribers to the Land-Bank*, [London], 1695.
- Land Bank, *The settlement of the Land-Bank, established Anno Dom. 1695 : with an abstract thereof annex'd*, [London? : s.n.], [1695].
- John Law, ed. by Antoin E. Murphy, *John Law's 'Essay on a land bank'*, Dublin, 1994.
- John Law, *Money and trade considered [electronic resource] : with a proposal for supplying the nation with money*, 1705.
- Lewis, Mark, *Proposals to increase trade and to advance his Majesties revenue*, London, 1677.
- Lewis, Mark, *Proposals to the king and parliament, or, a large model of a bank*, London, 1678.
- Machiavelli, N., *The prince*, ed. by Skinner Q., trans. by Price R., Cambridge: Cambridge University Press, 1988.
- [Neale, T.], *A proposal for raising a million on a fund of interest, by setting one hundred thousand pounds yearly, to pay 8 per cent. for one million two hundred thousand pounds, of which the king to have a million*. [Dated: January 29th, 1693 [o.s.], [1694].
- Neal, Thomas, *A way how to supply the King's occasions with two millions of money, on a fond of 120000l. yearly, which is at 6 only per cent. without any prejudice to ... present revenue...*, 1694.
- Neale, Thomas, *The national land-bank, together with money*, London, 1696.
- Paterson, William, *A brief account of the intended Bank of England*, London, 1694.
- Paterson, William, *Proposals made by William Paterson of London, Esq; on behalf of himself and others, for consolidating the perpetual fund of interest payable to the orphans and other creditors of the city of London, by virtue of the act of Parliament intituled An Act for Relief of the Orphans and Other Creditors of the City of London, and for Improving the Same so Consolidated Above the Interest Payable by the Said Act*, [London : s.n], [1695].
- Petty, William, Marquis of Lansdowne(ed.), *The Petty Papers Some Unpublished Writings of Sir*

- William Petty*, in two volume, New York, Augustus M. Kelley, 1967[1927].
- Richelieu, Armand Jean du Plessis, duc de, édité par Françoise Hildesheimer, *Testament politique de Richelieu*. Paris: Société de l'histoire de France, 1995.
- Smith Adam, *An Inquiry into the Nature and the Causes of the Wealth of Nations*, ed. by Campbell R.H. and Skinner A.S., 2 vols, Oxford, Clarendon Press, 1976 [1776].
- Smith, Adam, edited by R.L. Meek, D.D. Raphael, *Lectures on jurisprudence*, Stein. Oxford, 1978.
- Steuart, James, *The works, political, metaphysical, and chronological, of the late Sir James Steuart of Coltness, Bart*, London, 1805.
- Woodford, W, *A proposal, for paying national debts easily, by improvement of any good fund: For raising publick credit, and enriching the nation; by circulating the coyn for encouragement of trade*, [London : s.n.], [1690?].
- アダム・スミス『イギリス思想家書簡集 アダム・スミス』篠原・只腰・野原訳, 名古屋大学出版会, 2022 年。
- トゥーキュディデース『戦史』(上)(中)(下)久保正彰訳, 岩波文庫, (上)(中)は 1966 年, (下)は 1967 年。
- マキアヴェッリ『デイスコルシー「ローマ史」論』永井三明訳, ちくま学芸文庫, 2011 年。

二次文献

- Aveling, J.H. (1977[1882]), *The Chamberlens and the Midwifery Forceps Memorials of the Family and an Essay on the Invention of the Instrument*, New York, AMS Press.
- Brewer, J. (1990), *The Sinews of Power: War, Money, and the English State, 1688-1783*. New York: Knopf.
- Carruthers, B. G. (1999), *City of capital: politics and markets in the English financial revolution*, Princeton.
- Clapham, J. H. (1944), *The Bank of England, A History*, vol. 1, Cambridge.
- Dickson, P.G.M. (1993[1967]), *The Financial Revolution in England, a Study in the Development of Public Credit 1688-1756*, Aldershot, Gregg Revivals.
- Dickinson, H.T. (1977), *Liberty and property: political ideology in eighteenth-century Britain*, New York: Holmes and Meier Publishers.
- Epstein, G. A. (2019), What's Wrong with Modern Money Theory?: A Policy Critique. Cham : Palgrave Pivot. [ジェラルド・A・エプシュタイン『MMT は何が間違いののか? 進歩主義的なマクロ経済政策の可能性』徳永・内藤・小倉訳 東洋経済新報社 2020 年]
- Furuya, Yutaka, 'James Steuart's theory on banks: Development of trade and bank credit', *The History of Economic Thought*, vol 49 (2), 2007. [in Japanese]
- Gaskill, M. (2000), *Crime and Mentalities in Early Modern England*, Cambridge, Cambridge University Press.
- Haakonsen, K. (1981). *The Science of a Legislator; the Natural Jurisprudence of David Hume & Adam Smith*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hont, I. & Ignatieff, M.(ed.) (1983a). *Wealth and Virtue: The Shaping of Political Economy in the Scottish Enlightenment*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Hoppit, J. (2003), 'The landed interest and the national interest, 1660-1800', *Parliaments, nations and identities in Britain and Ireland, 1660-1850*, ed. by Hoppit, J., Manchester University Press, 83-

102.

- Horsefield, J. K. (1960), *British Monetary Experiments 1650-1710*, London, G. Bell and Sons Ltd.
- Innes, A. M. 1913, 'What is Money?'. *The Banking Law Journal*, 1913. [A. M. イネス「貨幣とは何か？」（上）（下）楊枝嗣朗訳, 『佐賀大学経済論集』52巻4号：53巻1号, 2020年]
- Ito, S. (2005), 'Charles Davenant's Politics and Political Arithmetic', *History of Economic Ideas*, vol.13, no.1 pp.9-36.
- Ito, S. (2011), 'The making of institutional credit in England, 1600-1688', *European Journal of the History of Economic Thought* 18: 4, 487-519.
- Ito, S. (2011), 'The ideal statesman: the influence of Richelieu on Davenant's political thought', in H.D.Kurz, T. Nishizawa, and K. Tribe eds., *The Dissemination of Economic Ideas*, Edward Elgar Publishing.
- Ito, S., 'Registration and credit in seventeenth-century England', pp. 137-162, *Financial History Review*, vol. 20:2, 2013.
- Ito, Seiichiro, *English Economic Thought in the Seventeenth Century: Rejecting the Dutch Model*. Routledge, 2020.
- Larkin, Charles (2014), 'The Great Recoinage of 1696: Charles Davenant and monetary theory', in ed. by Daniel Carey, *Money and political economy in the Enlightenment*, Voltaire Foundation Oxford.
- Motten, J. P. Vander (1980), *Sir William Killigrew (1606-1695): his life and dramatic works*.
- Motten, J. P. Vander (1980), 'Some problems of attribution in the canon of Sir William Killigrew's works', *Studies in Bibliography*, 33, 161-8 1980.
- Muldrew, C. (1998). *The economy of obligation*. Basingstoke: Macmillan Press.
- Pincus, S. C. A. (2009). *1688: The first modern revolution*. New Haven; London: Yale University Press.
- Murphy, Antoin E. (1997), *John Law: Economic Theorist and Policy-Maker*. Oxford: Clarendon Press.
- Pincus, P. and Wolfram, A. (2011). 'A proactive state? The land bank, investment and party politics in the 1690s', in P. Gauci (ed.), *Regulating the British economy, 1660-1850*. Farnham: Ashgate Publishing Limited.
- Pocock, J.G.A. (1975). *The Machiavellian Moment; Florentine Political Thought and the Atlantic Republican Tradition*, Princeton University Press, Princeton and London.
- Richard, R. D. (1929), *The Early History of Banking in England*, 1929.
- Rubini, D. (1970), 'Politics and the Battle for the Banks, 1688-1697', *English Historical Review* 85, 693-714.
- Viner, J. (1937). *Studies in the Theory of International Trade*. New York: Harper & Brothers.
- Waddell D.A.G. (1959), 'Charles Davenant-A Biographical Sketch', *The Economic History Review*, 2nd ser.11 (2), 279-288.
- Wennerlind, C. (2011), *Casualties of Credit: The English Financial Revolution, 1620-1720*, Cambridge, Massachusetts and London, England, Harvard University Press.
- Wennerlind, C. (2014), 'Money: Hartlibian Political Economy and the New Culture of Credit', in edited by Philip J. Stern and Carl Wennerlind, *Mercantilism reimagined: political economy in early modern Britain and its empire*, New York: Oxford University Press.
- Wray, L. Randall, *Modern money theory : a primer on macroeconomics for sovereign monetary systems*, New York : Palgrave Macmillan, 2012. [L. ランダル・レイ『MMT 現代貨幣理論入

門』東洋経済新報社，2019 年。]

伊藤誠一郎「チャールズ・ダヴナントにおける統治と経済」『三田学会雑誌』85 巻 2 号，195-216，1992 年 7 月。

伊藤誠一郎「チャールズ・ダヴナントの『信用』論—その特徴と変容—」『三田学会雑誌』87 巻 4 号，92-112，1995 年 1 月。

伊藤誠一郎「経済ナショナリズムと国家理性論についての再検討—『貿易の嫉妬』にみるリアリズムの意味—」『経済学史研究』第 53 巻 2 号，76-99，2012 年 1 月。

伊藤誠一郎「水田洋監訳・杉山忠平訳『国富論』における credit の訳語について」『アダム・スミスの会会報』No. 82，1-7，2015 年 3 月。

伊藤誠一郎「学会展望 貨幣・信用について今語られていること，昔語られていたこと」『イギリス哲学研究』第 46 号，75-82，2023 年 3 月。

岩田規久男『金融政策の経済学：「日銀理論」の検証』日本経済新聞社，1993 年。

榎本太「序にかえて」『十八世紀 イギリス小説とその周辺』日本図書刊行会，2005 年。

翁邦雄『金融政策：中央銀行の視点と選択』東洋経済新報社，1993 年。

金井雄一『中央銀行はお金を創造できるか 信用システムの貨幣史』名古屋大学出版会，2023 年。

田中正司『アダム・スミスの自然法学—スコットランド啓蒙と経済学の生誕』御茶の水書房，1988 年。

田中正司『経済学の生誕と『法学講義』—アダム・スミスの行政原理論研究』御茶の水書房，2003 年。

内藤敦之『内生的貨幣供給理論の再構築 ポスト・ケインズ派の貨幣・信用アプローチ』日本経済評論社，2011 年。

西山徹「詩はグローサーズ・ホールにあり—1690 年代貨幣危機の文学—」『17 世紀の革命／革命の 17 世紀』金星堂，2017 年。

宮田惟史『マルクスの経済理論 MEGA 版『資本論』の可能性』岩波書店，2023 年。

楊枝嗣朗『近代初期イギリス金融革命—為替手形・多角的決済システム・商人資本—』ミネルヴァ書房，2004 年。

楊枝嗣朗『歴史の中の貨幣 貨幣とは何か』文眞堂，2012 年。

楊枝嗣朗『貨幣と国家 資本主義的信用貨幣制度の生成と展開』文眞堂，2022 年。

(いとう・せいいちろう 大月短期大学経済科教授)

信頼と道徳性～18 世紀ブリテンの
銀行設立案で最も求められたもの（研究報告 No. 101）

令和 7 年 5 月 20 日 印 刷

令和 7 年 5 月 30 日 発 行

非売品

著 者 伊 藤 誠 一 郎

発行所 成 城 大 学 経 済 研 究 所

〒157-8511 東京都世田谷区成城 6-1-20

電 話 03 (3482) 9187 番

印刷所 レ タ ー プ レ ス 株 式 有 限 公 司
